

古フランス語音韻試論

——「ヴェルジ城主の奥方」研究——

篠 木 平 治

Essai de la Phonétique Historique de l'Ancien Français —Etude Linguistique de “La Chastelaine de Vergi”—

Héiji Shinogui

Résumé

Les consonnes latines peuvent, au cours de l'évolution, se conserver ou se modifier. Les modifications dont elles sont susceptibles se réduisent à deux chefs principaux, l'affaiblissement et le renforcement.

L'affaiblissement est relatif, sans parler de la phonétique syntactique, à la phonétique du mot :

- 1) la place qu'elles occupent dans le mot, où elles sont soit initiales, soit finales, soit intérieures ;
- 2) l'entourage des consonnes à l'intérieur du mot, où elles peuvent être intervocaliques ou se trouver derrière une autre consonne ou devant une autre consonne ou entre deux consonnes ;
- 3) la place qu'elles occupent dans les syllables, où elles sont explosives ou implosives ;
- 4) la situation de la consonne par rapport à l'accent du mot.

On verra en effet qu'en général la position forte est à l'initiale de mot et à l'initiale de syllabe à l'intérieur, appuyée, et que la position faible est l'initiale de syllabe intervocalique ; la finale de syllabe à l'intérieur, appuyante ; la finale de mot et la position entre deux consonnes.

Le renforcement dépend peu de la phonétique du mot et son aboutissement est parfois un des traits les plus caractéristiques de la phonétique française.

La sonorisation, passage de l'occlusive ou de la spirante sourde à la sonore correspondante, comme la spirantisation, celui de l'occlusive à la constrictive, est l'effet d'un affaiblissement articulaire sous l'influence des sons avoisinants, tandis que la palatalisation d'une consonne, occlusive ou spirante, qui est par définition indépendante de l'articulation des phonèmes subséquents, (bien qu'un phonème palatal favorise la palatalisation), est avant tout l'effet d'un renforcement articulaire. Ce sont les phénomènes principaux qui affectent le consonantisme du latin vulgaire et du latin tardif.

ラテン語の子音は、ラテン語がフランス語へ推移する過程で、或は保持され、或は変容する。そ

の変容は、統辞論的音韻を別にすれば、主に、語の音韻に依存する弱音化と、殆ど語の音韻に無関係な強音化の現象に帰着する。

弱音化は子音が語の中で占める位置、語中の子音に隣接する音、子音が音節の中で占める位置、子音と強勢母音との位置関係などによって起こる様々な変化である。

これらの変化に対する子音の抵抗力は、一般に、語頭と先行する他の子音に支えられる語中では強く、母音間の語中、他の子音に先行する語中、子音間、語末では弱い。しかし、語末の子音に関しては、単音節語は特別であり、形態論的な現象など特殊な要因が関与する。

一方、強音化による子音の変容はしばしばフランス語の音韻の最も特徴的な一面を成す。

有声化と摩擦音化が隣接音の影響による弱音化の結果であるのに対して、本来後続音に依拠することのない口蓋化は強音化の現象であり、いずれも俗ラテン語と後期ラテン語に係わる音韻推移である。

古フランス語音韻試論

子 音

I ラテン語の子音とフランス語の子音

ラテン語の子音には喉頭音 *h* ; 喉音に軟口蓋音 *k*, *g*, 硬口蓋音 *y*, 軟口蓋震動音 *l* , 軟口蓋鼻音 *ñ* ; 歯音に閉鎖音 *t*, *d*, 摩擦音 *s*, *Z* ; 歯茎音に震動音 *R*, *l*, 鼻音 *n* ; 唇音に両唇閉鎖音 *p*, *b*, 唇歯(両唇)摩擦音 *f*, 両唇軟口蓋摩擦音 *w*, 両唇鼻音 *m* がある。

すでにラテン語期に萌すフランス語形成の過程に現われる主な子音は、閉鎖音では中部硬口蓋音 *k*, *g* ; 半閉鎖音では歯茎音 *ts*, *dz*, 後部歯茎音 *tʃ*, *dʒ* ; 摩擦音では軟口蓋音 *x* (無声音), *ɣ* (有声音), 前部硬口蓋音 *ʃ*, *ʒ*, 歯間音 *θ*, *ð*, 唇歯音 *v*, 両唇音 *β*, 両唇硬口蓋音 *w* ; 震動音では軟口蓋音 *r*, 中部硬口蓋音 *l* ; 鼻音では中部硬口蓋音 *ŋ* である。

現代フランス語はラテン語の子音から *h*, *l*, *ñ*, *Z* を除く 14 の子音を保持し, 更に, ラテン語の子音の推移から *z*, *ʃ*, *ʒ*, *w*, *ŋ*, *l*, *v* を加えた 21 けの子音組織に至る。

II 喉頭音 H

1. 初期ラテン語の帯気音 *h* は, 俗間ではローマ共和制の末期から消失する。⁽¹⁾ 語頭の *h* は無音となり書法からも姿を消す。

Hora > *eure* 24, *habere* > *avoir* 63, *honore* > *onor* 117, *ha(c) hōra* > *ore* 174.

しかし, 無音の *h* が *honor* 64, *hui* (< *hodie*) 585 の如く書法上現われることもある。

2. ゲルマン語の *h* が 5 世紀頃ガリアの北部に導入されて語頭に現われ, 気音を強く出して発音されたが, この気音は 13 世紀の初頭から消失する。⁽²⁾

**Haunitha* > *honte* 93, **hatire* > *haïr* 152, *hard* > *hart* 667, **hatina* > *haine* 795.

III 喉 音

1. C, G+E, I

(1) ラテン語の *Z* はギリシャ語から借用した複合音である。

(1) Cf. P. Fouché, *Phonétique historique du français*, Volume III. *Les Consonnes*, Klincksieck, 2e éd., 1966, p. 578.

(2) Cf. *Ibid.*, p. 580.

a) 語頭の c(+e, i)

語頭の k は後につづく硬口蓋母音の調音点に同化して k に硬口蓋化し、更に、 k は前方に調音点を進めて t となり、4 世紀末には tsy に歯擦音化する。その後、11・2 世紀には ts に非口蓋化し、13 世紀には t が消失して s に至る。⁽¹⁾

Celare > celer 3, centu > cent 457, *celu > ciel 776.

b) 子音+語中の c(+e, i)

子音が先行する語中の c(+e, i) では、c に先行する子音は閉鎖音が流音であるときは、語頭の c(+e, i) と同様に $k > t > ts > ts > s$ へと変化する：Mercede > merci 61。⁽²⁾

なお、c が消失すべき語末の母音の前にあるときは、語末の s は音韻上無音となる：Dulce > dous 296, falce > faus 577.

*Conoscere > (re) conoistre 314 については、Fouché は k が先行する s と同化して k から yod に変わるとしている。⁽³⁾

c) 母音+語中の c(+e, i)

この位置にある k は口蓋化し、調音点を前方に移して歯擦音化して後、5 世紀には dzy に有声化してから、yod が dz の前に転移して $ydzy$ を成す。その後、非口蓋化し、d が消失して z となる：Placeat > plaise 499, jacere > gesir 569.

Facere > fere 96 では ke は ge に有声化し、後に見るように、後続する硬口蓋母音の影響を受けて硬口蓋化し、gye > yye > ye へと変化する。⁽⁵⁾

k が消失すべき語末の母音の前にあるときは、有声化と yod の転移の後、再び無声化して $-ts > -s$ となり、13 世紀にはこの s も脱落する。⁽⁶⁾ しかし、書法上はしばしば z である：Vice > foiz 402, voce > voiz 422。⁽⁷⁾

C + e, i に語末の子音 t がつづくときは $-st$ となった。

(1) Cf. E. et J. Bourciez, Phonétique française, Klincksieck, 1967, § 116 ; Fouché, Phonét., p. 553.

(2) Mercede では、強勢の自由母音 e が e_i に二重母音化し、先行する口蓋音から生じる yod と yei を成す。その後、中央の e はそれを囲む y と i に同化され、yii から i に縮合される：Mercede > *meRkēde > *meRtṣeide > *meRtṣyeiδ(θ) > meRtsi > meRsi > [mersi]

しかし、yod を想定せず、口蓋化した破擦音 ts の影響によって e_i の e が狭められ、 $tṣei > tṣii > tṣi$ へと推移したとも考えられる。

(3) Cf. 拙論「古フランス語音韻試論」, 母音 II, 6, c), 注(12), 群馬県立女子大学紀要, 第4号, 1984.

(4) Cf. Placeat > *plākyat > *platyat > *platṣyat > *pladzyat > *plajdzyat > *plajdz(y)at > *plajdzēθ > *plei(d)zē > plēz(ē) > plēz(ə) ; André Lanly, Fiches de philologie française, Bordas, 1971, 4e éd., pp. 259-260.

(5) Cf. FákeRe > *faḳyeRe > *fagyeRe > *fayyeRe > *fayeRe > *fay(e)Re > faḳRe > feḳRe > fēRe > fēr(ə)

(6) Cf. Fouché, Phonét., p. 663.

(7) Cf. Voce [woke] > *voke > *votē > votṣe > *voydz(y)e > *voydz > *voits > [vwa]

Tacet > test 203, placet > plest 204, jacet > gist 838.

Facit は *faist 或は *fest となるべきであり, fet 99 は規則的ではない。不定詞 fere の語幹に依ってつくられたか、或は tra(h)it に倣ったものである。⁽⁸⁾

d) 語中の c + y

ky の k は調音点を前方に進め、子音群 kty を成し, ty > tsy と同様に kt⁽⁸⁾sy となり、二つの閉鎖音の間の同化作用によって t/tsy となる。その後、t/tsy は母音の後にあっても有声化せず、tt が t に単純化され、外破音の y が脱落して ts から s に縮約される。語末となる s は 13 世紀に無音となるが、書法上 z が現われる。⁽⁹⁾

Solaciu > solaz 285, facia > face 310, brac(h)iu > braz 398.

e) G+e, i ; G+y

語頭の g(+e, i) は調音点を前方に移して g に湿音化し、更に、d を経て、順行同化によって d^zに至り、13 世紀に z に縮約される : Gente > gent 1.

G が n の後にあるときは、g は n を ŋ に湿音化するが、語末では先行する母音と結合する : Stringit > estraint 835.

G(+e, i) は、母音が先行するときは、後続する硬口蓋母音に隣接する部分でその硬口蓋音の性質を強め、先ず gy となり、二重子音 -yy- を成し、やがて -y- に単純化される。⁽¹⁰⁾

Page(n)⁽¹¹⁾se > païs 7, vigilavit > veilla 149, cogitat > cuide 648, regina > roïne 796, *tragit > trait 853.

2. C, G+A

a) 語頭の C, G(+a)

語頭の c + a は 6 世紀の中頃 ka に口蓋化し始め、更に、調音点を前方に移し ta となり、8 世紀の末には t^ʃa に至る。⁽¹²⁾その後、13 世紀には歯音 t が消失して s となる。フランス語の最も特徴的な音韻推移である。⁽¹³⁾

Camera > chambre 37, causa > chose 122, *capu > chief 142, cantione > chanson

(8) Cf. Bourciez, Phonét., § 116, Historique.

(9) Cf. Fouché, Phonét., p. 911.

(10) Cf. Ibid., p. 605.

(11) Cf. Page(n)se > *pagyese > *payese > *payeise > païs > peïs > peï(s)

(12) Cf. 「母音 II」 6, c), 注(17).

(13) Cf. 拙論「古フランス語音韻試論」, 母音 I, B, 語頭の E, g), 群馬県立女子大学紀要, 第 3 号, 1983.

(14) Cf. Bourciez, Phonét., § 120, H.

294, cane > chien 358, *caminu > chemin 377, caru > chier 534, calet > chaut 597, *cadere > cheoir 730.

語頭の g + a も, c + a の変化と同じ時期に g > g̃ > d̃ > d̃ž を経て, 13世紀中に ž に至る : Gaudia > joie 9, *gaudir > joir 181.

b) 子音+語中の C, G(+a)

子音が c, g(+a) に先行するときは, 語中でも語頭の場合と同様に各々 š, ž となる : *Targa > targe 390, bucca > bouche 398.

弱音節の母音の消失によって子音 + c(+a) が形成される場合は, 或は s に或は z に至る Collocare > couchier 517, manducare > mengier 531.

c) 母音+語中の C, G(+a)

K, g(+a) に硬口蓋母音 a, e, i が先行するときは, 本来の g と k の有声化による g は, それを囲む母音との接触によって狭窄音 ɾ に弱まり, 硬口蓋音の性質を強め ɾy から yy > y に至り, 先行する母音と結合する。

Legale > loial 2, amica > amie 65, mica > mie 66, precat > prie 100, dicat > die 113.

K, g(+a) に軟口蓋母音 o, u が先行するときは, 本来の g も二次的な g も, 狭窄音 ɾ に弱まってから, ɾ は先行する軟口蓋音の影響を受けて w に唇音化し, 消失する。しかし, rogat > rueve 856 に於ては, この w は消失することなく, [v] に歯音化する。O の二重母音化以前のことである。従って, rogat > *rowat > *rovat > rueve である。

3. C, G+O, U

a) 語頭の C, G(+o, u)

軟口蓋母音に先行する語頭の c, g はそのまま保持される : Cor > cuer 50, corpus > cors 301.

(15) アクセントのある音節に先行する O は母音間の c が有声化する前に消失する : Collocare > *kql̥kaRe > *kql̥kaRe > *kql̥taRe > *koł̥t̥saRe > *koł̥t̥seR(e) > *koł̥t̥sieR(e) > *koł̥t̥sy̥eR > [kuł̥t̥sy̥eR] > [ku(t)̥s̥(y)̥e(R)] > [kuš̥e(r)] (cf. Lanly, Fiches, pp. 134-5.)

(16) Manducare では, manducat の如く語幹の u に強勢のある語形とのアナロジーによって prétonique の語中音消失が遅れ, k が母音間で有声化した : ManducaRe > *mandugaRe > *mand'gaRe > *mand'đaRe > *mandžyaRe > *mandž(y)aRe > *mandž̥eRe > *mandž̥ieRe > *mandž̥ieR(e) > *māndž̥ieR > *māndž̥yéR > mān(d)ž̥(y)̥eR > mā(n)ž̥e(R) (cf. Ibid., pp. 211-2.)

(17) Cf. Mika > *miga > *mīra > *mīrya > *miyya > *miy(y)̥e > mi̥e

(18) Cf. Fouché, Phonét., p. 613.

b) 子音+語中の C, G(+o, u)

子音に語中の c, g(+o, u) がつづくときも, 語頭の場合と同様に音韻の変化はない: Angustia > angoisse 303.

c) 母音+語中の C, G(+o, u)

母音に語中の c, g(+o, u) がつづく場合は, 母音間にある k は先ず g に弱音化し, 狭窄音 r となり, 軟口蓋音の前で yod に変ることができず, 完全に消失する。

Dicunt > dient 61, tacuit > tut 832, tacutu > teü 957.

d) 語末の C, G

O, u の消失によって語末となる c, g は (g は k に無声化してから) 消失する: Longu > lonc¹²⁷.

しかし, 近代語では書法に g が復活されて long となる。

A, e, i が先行する k は, g に有声化してから, 語末となる前に, r を経て yod となり, 先行する母音と接する: Preco > pri 498, amicu > ami 800.

Locu > leu 71, jocu > geu 269 の音韻推移については「母音Ⅱ」, 5, c) 参照。

母音の後にあって, ラテン語に於てすでに語末である k は, 俗ラテン語から消失している。

Si(c) > si 3, ně(c) > ne 33, illa(c) > la 508.

4. C, G+子音

a) 語頭の子音群

語頭の c, g に震動音 r, l がつづくときは, c, g に音韻の変化はない。

Grande > grant 82, *greve > grief 141, credere > croire 248, claudire > clorre 477.

b) 語中の子音群

母音が先行する語中の c(g)+震動音 r, l では, c, g は yod となる。

(19) 女性形は古くは longe(<longa) であり, 規則的な音韻変化を示すが, longue 68 はこの男性形に依ってつくられた語形である。一方, large 389 は男性形である。女性形 large が男性形 larc(<largu) を排除して男性形, 女性形が同形となった。

(20) Cf. préco > *pręco > *pręro > *pręryo > *prieyyo > prieyyo > pri

Sacramentu > serement 219, oc(u)los > ieus 308, lacrima > lerne 469, auric-
(u)la > oreille 846.

Ct, gt, gd などの子音群では, c と g は歯音の前で yod となって先行する母音と結合する。

Dictu > dit 14, *d(i)rectu > droit 98, nocte > nuit 108, lectu > lit 433, tracta >
traite 567, *frig(i)da > froide 867.

*Auctoricare > otroier 29 では, 二つの無強勢母音の間にある -ct- の c が t に同化され,
*auttricare > -otr- となって c が消失する。*Jectare > geter 226 の場合も同様である。

-ct- に n が先行する場合は, n は喉音の前ですでに軟口蓋音 ñ であったが, c が子音の前で調
音をゆるめ, 狭窄音 x から yod となって ñ を口蓋化し, 湿音化した。この ñ の屈折から yod が生
じ, ñ が t の前で n に歯音化する: Punctu > point 197, sanctus > sains 417.

子音群 x (cs) でも, 強勢母音の後では, k が調音点を前方に移して歯擦音の調音点に近づき,
狭窄音 x を経て yod となる: Laxat > lesse 244.

Exire > eissir, oissir から issir 393 への推移については「母音 I」, B, 語頭の E, e) 参照。

接頭辞 ex の x は, 俗ラテン語から s に単純化され, 子音の前では es- となった: Excondictu >
escondit 196.

なお, example 951 はラテン語の接頭辞を保持する学者語である。

子音群 cw, gw は qu(cu, co), gu の書法で表わされるが, 語頭或は子音につづく語中では, 唇
音 w が消失し, 喉音のみ保持される。

Qui > qui 2, quando > quant 5, quomo (do) > com 143, quaerere > querre
169, quare > quar 171, *gwardare > garder 704.

母音間にある語中の cw, gw はその喉音を失う: Aqua > eve 308.

(21) Oc(u)los > ieus の音韻推移は次の如くである。まず, 次末音節の弱母音 u が消失して, 子音群 -cl- の
c が有声化し, 調音を弱めて摩擦音 ʔ となる。更に, 調音点を前に進めて ʔ は yod となり, 後続音 l を湿
音化する。同時に, 5 世紀の後半, 開母音 q が二重母音化し, uoy を成す。その後, この yod は l の中に
混入し, uoy は uo に縮約される。語末の母音が消失すると, 湿音化された l は語末子音 s の前に位置する
ので, 語中音 t が添加され, l は ts の前にあって l に非口蓋化し, 更に, t に軟口蓋化して母音化する。
二重母音 úo は, úe > úe > úoe > wóe の段階で, w が後続の母音 u との異化作用によって y に至る。
なお, Bourciez は語中音 t を想定していない (cf. Phonét., § 70, R.I.): Oc(u)los > *q'clos > *q'glos >
*q'rls > *q'yls > *uq'yls > *uol(ē)s > *uolts > *ueits > *[üeits] > *[üeuts] > *[üoeuts] >
*[wœuts] > *[yœuts] > [yé(u)(t)s] > [yoe(s)] (cf. P. Fouché, Phonétique historique du français,
Volume II, Les Voyelles, Klincksieck, 2e éd., 1969, pp. 323-4; Lanly, Fiches, pp. 231-3.

(22) Cf. Bourciez, Phonét., § 135, R.I.

(23) Cf. 「母音 II」, 6, d), 注(24).

(24) Ks に先行する音節に強勢が置かれるこの laxat などの語形とのアナロジーによって, laxare も lessier
770 となった (laxare では強勢音節に先行する ks の k は s に同化されるので, 不定詞は lassier となる
はずである)。

(25) Cf. 「母音 II」, 1. a), 注(4).

5. I

ラテン語の i (書法は後に j) は、俗ラテン語で yod となり、その調音は後部硬口蓋音 y によって [jy] に強められ、更に dÿy となり、その後、dzy > dz を経て z に至る。書法は j 或は g である。

*Justa > joust 109, *jectare > geter 226, jocu > geu 269, jacere > gesir 569,
jacet > gist 838, justitia > justise 894.

語中では yod が先行する母音に吸収される : *Sejor > sire 60.

IV 齒 音

1. T, D

a) 語頭の T, D

語頭では閉鎖音 t, d は、母音の前でも子音の前でも保持される。

Domina > dame 20, terminu > terme 32, *d(i)rectu > droit 98, dolu > du
114, tempus > tens 129, terra > terre 170, tortu > tort 187, tres > trois 456,
tab(u)la > table 514.

*Tremet > crient 283 は例外である。Tremere はケルト語の語幹 *krid- の影響を受けて
criembre となった。⁽¹⁾

b) 子音+語中の T, D

子音が先行する語中の t, d は、語頭の t, d と同様に保持される : Prendere > prendre 175,
*misteriu > mestier 717.

弱音音の消失によって子音が t, d に先行するときは、t はそのまま保持されるか、d となって
現われるかいずれかであるが、d は常に保持される。

Com(i)te > conte 76, mat(u)tinu > matin 150, *bell(i)tate > beauté 157,
comp(u)tat > conte 246, *fall(i)ta > faute 321, *male-habitia > maladie 516,
rigida > roide 868.

(26) 語中の子音群 -dzy- は、yod を dz の前に転移させ、この内破音の yod と先行する無強勢母音 a との合着から生じる ai は、12世紀中頃 e に単母音化し、その後、e に狭まる (cf. 「母音 II」, 1, c)). この e は 13世紀に e に弱まるが、16世紀に再び e が復活する (cf. 「母音 I」, B, 3. 語頭の A) : Jacēre > *yakeRe > *yatyeRe > *yatſyeRe > *ſyadzyeRe > *dſyadzyeRe > dſyaɪdzyeRe > *dž(y)eɪdziRe > dže(i)ziR > (d)žēzi(R) > žēziR > [žezir] (cf. Lanly, Fiches, pp. 184-5.)

(27) Cf. 「母音 II」, 2. c), 注 (6).

(1) Cf. Bourciez, Phonét., § 140, R.I.

c) 母音間の語中の T, D

母音間に位置する語中の t は5世紀の初め有声化し、その後、本来の d もこの二次的な d も、その調音を弱め、8世紀には摩擦音 δ となり、11世紀末には完全に消失する。

Fidare > fier 4, credere > croire 244, considerare > consirrer 295, *aetaticu > eage 336, pratellu > prael 395, vita > vie 453, laudat > loe 487, videre > veoir 521, sedere > seoir 522, *potere > pooir 787, spat(h)a > espee 920, audire > oïr 928.

d) 語中の T, D + 子音

1) T, D(+r)

子音群 tr, dr に他の子音が先行するときは、t は変化せず保持される。

Alt(e) re > autre 13, prend(e) re > prendre 175, pend(e) re > pendre 176, contrata > contree 229, perd(e)re > perdre 327, intrare > entrer 392, mostravit > moustra 510, tender(e)-habet > tendra 557.

Tr, dr が母音間にあるときは、tr は先ず dr となり、本来の dr も二次的な dr も、その d が母音間にある場合と同様に摩擦音 δ となり、逆行同化によって r となる。-rr-は-r-に単純化されることもある。

*Sedreat > serroit 65, *poterebat > porroit 69, *iterante > errant 111, *nutrirebam > norriroie 123, *ad-retro > arriere 243, claud(e)re > clorre 477, *poter(e)-habet > porra 561, *rid(e)re > rire 940.

2) 語中の T, D (+ r 以外の子音)

語中に於て t, d に r 以外の子音がつづくときは、母音が先行する場合も子音が先行する場合も、t, d は後続する子音に同化されて消失する。

Perd(i) ta > perte 228, fort-(i)mente > forment 467, mand(u)care > mengier 507.

語末の s は t と結合して複合音 ts を成し、-z と綴られる: Videtis > veez 71, tenetis > tenez 534, sanitates > santez 780.

この ts は13世紀に s に縮約され、やがて消失するが、書法上は、名詞の複数形では17世紀の中頃まで z が残され、動詞の二人称複数の語尾には今なおこの z が用いられている。

3) Ty, Dy

Ty に子音が先行するときは、語頭の c(+e,i) 或は語中の子音 c(+e,i) と同様に、2・3 世紀に t が y に同化され、ty となり、更に、4 世紀には t^sy > tsy に歯擦音化し、11・2 世紀には ts に非口蓋化する。歯音 t が消失するのは13世紀である。

Cantione > chançon 294, neptia > niece 342, *mentionica > mençonge 595,
fidentia > fiance 606, *comin(i)tiatu > commencié 609.

子音群 cty は逆行同化によって tty > ty となり、すでに述べた過程を経て s に至る : Suspectione > soupeçon 224.

しかし、sty では順行同化によって ssy に変化し、yod が ss の前に転移して yssy となる : Angustia > angoisse 303, ostiu > uis 473.

Ty に母音が先行するときは、母音 + c(e,i) の如く、ty > t^sy > tsy から dzy に有声化し、yod が dz の前に転移して ydzy を成す。その後、非口蓋化し、歯音 d が消失して z に至る : Ratione > reson 59.

なお、*proditia > proëce 157, laetitia > leece 780 と justitia > justise 894 の語尾 -itia に関しては「母音Ⅱ」, 3, c) 参照。

Dy が母音間に位置するときは、d は y の同化作用によって4世紀後半 yy となり、やがて y に単純化し、先行する母音と接する。

Gaudia > joie 9, *inodiu > enui 57, appodiatu > apoiez 421, audiat > oie 437,
adjace(n)s > aise 500, hodie > hui 585, mediu > mi 898.

子音群 ndy でも d が消失するが、y は鼻子音を湿音化する。

Verecun(d)ia > vergoingne 17, Burgun(d)ia > Borgoingne 18, gran(d)iore > greignor 532.

Dy が語頭にあるか、語中にあって n 以外の子音が先行する場合は、d は調音を強め、yod に引かれて調音点を後方に移動し、dy > d^sy > dʒ(y) > dʒ > ʒ へと推移する : Diurnu > jor 24, vir(i)diariu > vergier 35.

D(e)unde > dont 508 の語頭音節の e は yod となる前に省略されていた。⁽⁶⁾

*Aetaticu > eage 336. *coraticu > corage 692 の接尾辞 -aticu の推移については「母音Ⅱ」, 1, c), 注 (13) 参照。

e) 語末の T, D

語末の t に単母音が先行する場合、実詞ではガリア北部のラテン語でも、caput はすでに *capu

(2) Cf. 「母音Ⅱ」, 6, c), 注 (11).

(3) Cf. Ibid., 6, c), 注 (16).

(4) Cf. 「母音Ⅰ」 B, 3, 語頭の A, e), 注 (17).

(5) Cf. Fouché, Phonét., p. 909.

(6) Bourciez, Phonét., § 148, R.I.

(> chief 142) であったが、動詞の語末では、t が三人称単数の指標字であることから、この t はその後も保持され、やがて θ に弱音化してから、一般に消失し始めるのは9世紀の末であり、11世紀末に完全に消失する。⁽⁷⁾

Amavit > ama 21, fu(i)t > fu 43⁽⁸⁾, portat > porte 116, *inodiarat > anuiera 370, *audit (<audivit) > oï 396, donat > done 439.

しかし、子音の後或は二重母音の後では、t の消失が一般化するの⁽⁹⁾は13世紀である。

Venit > vient 5, dictu > dit 14, deb(e)t > doit 14, habe(b)at > avoit 28, sap(i)t > set 115, vid(i)t > vit 380, plangit > plaint 480, habuit > ot 866.

動詞以外でも同様の消失が見られる。

Grande > grant 11⁽¹⁰⁾, subinde > sovent 15, corte > cort 47, parte > part 92, tortu > tort 187, sacramentu > serement 219, mundu > mont 348, lectu > lit 433, tarde > tart 668, *assaltu > assaut 956.

但し、後接語 inde > en では、……cil joie en pert 9 のような文章構造に於て語末の t が早い時期に脱落した。⁽¹¹⁾

母音間の t は5世紀の初め有声化し、本来の d と同様に語末の母音が8世紀に無音化するとき、摩擦音 δ となり、11世紀末には完全に消失し、一般に書法からも姿を消す。

Mercede > merci 61, fide > foi 73, quomo(do) > comme 96, credutu > creü 160, pede > pié 373⁽¹²⁾, salute > salut 398⁽¹³⁾, palludu > pale 868⁽¹⁴⁾.

ラテン語の絶対語末の d の消失は ad > a 17, apud > o 275, quid (無強勢), quod > que 21, quid (強勢) > qoi 121 に見られる。

2. S

a) 語頭の S

(7) Cf. Fouché, Phonét., pp. 657-8, 663.

(8) Fu は13世紀の初め *prist > prit 239 などの語形の影響を受けて fut に置き換えられるが、この新しい語形が定着するのは15世紀中のことである。Cf. Ibid., p. 658.

(9) Cf. Ibid., p. 657.

(10) 女性形 grant は bon(n)e などの形容詞に倣って語末に e をとったが、更に, Chaude, froide などとのアナロジーによって grande となったと推定される。Cf. Ibid., p. 505; Bourciez, phonét., § 152, R. III.

(11) Cf. Ibid., § 152, R. II.

(12) 近代語の pied はラテン語の d を復活させた学者語である。

(13) Salu(t) には任意に書法上の t が現われることがある。

(14) Cf. Palludu > *palęðę > *palęę > palę.

ラテン語の語頭の s は母音の前では保持される。

Suspirare > souspirer 108, solu > seul 155, subvenit > sovient 212, sero > soir 560, soror > suer 613.

子音に先行する語頭の s は語頭音 i⁽¹⁴⁾ が添加されて後, 11世紀以前に消失する⁽¹⁵⁾。

Statu > esté 130, stabat > estoit 205, stringit > estraint 835, spat(h)a > espee 896.

ゲルマン語 *snel に由来する isnel 87 の語頭の i は, e-e>i-e の異化作用による⁽¹⁶⁾。

b) 子音+語中の S

子音と母音の間にあるラテン語の s は, 語頭の s + 母音の場合と同様に保持される。

Consiliu > conseil 3, considerare > consirrer 295, insimul > ensamble 434.

子音群 ss は開音節の e, a, o の二重母音化の後に単純化されるが, 母音間にあつて s と書かれる [z] との混同を避けるために, 書法上二重子音が保持される⁽¹⁷⁾: *Assaltu > assaut 956.

Missa は, 男性形 mīssu がこの動詞の定過去の強勢形の 影響によって *missu > mis となったことから, mise 67 となるが, 古くは missa > messe があり, promesse 918 にその名残りを留めている。

接続法半過去の三人称単数では書法からも二重子音が消える。ここでは強勢母音の後にある母音 e が消失する。

Venisset > venist 36, sapuisset > seüst 37, habuisset > eüst 50, potuisset > peüst 51, amasset > amast 52, fecisset > feüst 53, dixisset > deüst 214, mississet > meüst 249.

c) 母音間の語中の S

母音間に位置するラテン語の s は, 母音間の他の無声子音の有声化と同じ時期に [z] となる。書法は変わらない。

Wisa (ゲルマン語) > guise 94, causa > chose 122, desiderat > desire 225, ausat > ose 314, bisunja (フランク語) > besoinne 364, me(n)sura > mesure 884.

(14) St, sp, sc などの子音群が語頭にあつて発音が難しいために, 語頭音 i はすでに 2 世紀から現われる。

Cf. Fouché, Phonét., p. 694.

(15) Cf. Ibid., p. 696.

(16) Fouché, Phonét. Vol. II. p. 455.

(17) Cf. Fouché, Phonét., p. 814.

なお, dexistes > desistes > deistes 202 に於ける母音間の s の消失については「母音 I」, B, 3. 語頭の I, b), 注 (39) 参照。

d) 語中の S + 子音

無声子音に先行する語中の s は, 気音 h となってから12世紀末に無音化する¹⁹⁾。

Souspirare > souspirer 109, dexistes > deistes 202, *misteriu > mestier 717, mo(n)strat > moustre 869.

書法から s が消えるのは18世紀の中頃である²⁰⁾。

指示形容詞 ecce-istu は後接語として用いられて cest 130 となる。

接頭辞 dis- は規則的に des- である: Discoperit > descuevre 5.

S は消失するとき先行する母音を長音化する。この長音化は一般に近代の書法では accent circonflexe によって表わされることもあり, 弱音節の e の上に accent aigu が現われることもあるが, この消失した s の痕跡を全くとどめないことも多い: Dites, métier, montre.

弱母音の脱落によって ss が r と隣接するときは, 調音を容易にするために, その間に t が生じ, その結果, この歯音の前で s が消失する: *Essere > estre 2, *conoscere > (re)connoistre 314.

子音群 sy と ssy では s, ss の前に yod が転移して現われ, 先行する母音と結合する。S は有声化し, ss は無声音のままである。

*Possiat > puisse 259, cognoscam > connoisse 304, basiare > besier 466.

e) 語末の S

語末或は語末となる s の消失は, -t を除く他の語末の子音と同様に12世紀後半から始まり, 13世紀に一般化する²¹⁾。しかし, 書法から消え去ることはない。

Foris > fors 39, visu > vis 69, tempus > tens 129, corpus > cors 301, *malifatus > mauvés 302, tres > trois 456, ostiu > uis 473, assessi > assis 531, vos > vous 534, plus > plus 534²²⁾, sursu > sus 873²³⁾, lassu > las 885²⁴⁾.

Sensu から二つの語形 sens 352, sen 952 が現われる。ラテン語に依る語末の s の発音の復活

(19) Cf. François de la Chaussé, Initiation à la phonétique historique de l'ancien français, Klincksieck, 1974, 6.1.2.1.

(20) Cf. Bourciez, Phonét., § 157, H.

(21) Cf. Fouché, Phonét., p. 663.

(22) Plus は17・8世紀にはその用法と意味に関係なく常に [plü] であったが, 今日, 休止の位置では語の意味によって, [plü] 或は [plüs] と発音される。

(23) 今日, sus には courir sus à qn, en sus, en sus de など限られた用法しか残っていないが, いずれの場合も [sus] と発音されることが多い。

(24) 間投詞 las でも, 今日, [s] は消えることもあり, 発音されることもある。発音される場合は, おそらく表現性の必要から [s] が加えられるのであろう。Cf. Ibid., p. 680, R. II. 因に, hélas (<hé+las) では今日常に [s] が発音される。

は18世紀から一般的となる^㉙。

すでに述べたように、破擦音 ts は t が脱落して s となるが、z と表記される。

Amatus > amez 72, sapiatis > sachiez 176, dentes > denz 322, vice > foiz 402,
amantes > amanz 439, *ame(b)atis > amiiez 584.

Nにつづく語末の s も z と綴られる； Annus > anz 456.

湿音化した l につづく語末の s はテキストでは s と表記される。

Bellus > biaus 43, melius > mieus 307, oc(u)los > ieus 308.

これらの -us の s は, dous > deus 78, invi(di)osus > envious 201, dulce > dous 296 と同様に、近代語では x と表記される。-us を表わす書法 x を用いながら、更に二重に u を復活させている。

すでに引用した fors, sus, plus の他, versus > vers 98, minus > mains 262, deorsum > jus 873 など多くの不変化詞に現われる語末の s がアナロジーによって、語源に s がいない語にも広がった：Sine > sanz 36, unquam > onques 131.

直接法現在の一人称単数, *sayo > sai 74, *suyyo > sui 76, *di(go) > di 102, credo > croi 260, *deyo > doi 335, *voleo > vueil 363, video > voi 603 などには、語末に s のある動詞 *possyo > puis 258, *conosco > connois 802 などとのアナロジーによって、12世紀中に s が現われ始める^㉚。

半過去と条件法の一人称単数, *direa > diroie 133, *sap(i)ebam > savoie 502, *creder(e)-(hab)ebam > croiroie 542, predebam < prenoie 798 の語尾には中代フランス語期に書法上の s が加えられる。

定過去では, vidi > vi 537 は二人称単数とのアナロジーによって、近代語では vis となる。

接続法現在の *siam > soie 361 も16世紀頃アナロジーによって語末に s をとる^㉛。

V 唇音

1. P, B, V

a) 語頭の P, B

語頭の p, b は母音の前でも子音の前でも保持される。

Bene > bien 37, pauci > poi 55, poena > paine 80, plorare > plorer 110, punctu
> point 197, bucca > bouche 398, brac(h)iu > braz 398, bella > bele 613.

b) 語頭の V

^㉙ Cf. Bourciez, § 160, R. I.

^㉚ Cf. Fouché, Phonét., Vol. II, p. 182.

^㉛ Cf. Fouché, Le verbe français, Klincksieck, 1967, p. 420.

語頭の $v[w]$ は紀元前1世紀にすでに β に変化しており、3世紀中に唇歯音 $[v]$ となる⁽¹⁾。

Veru > voir 213, via > voie 362, voce > voiz 422, vita > vie 453, *volere > voloir 564, ventre > ventre 725.

しかし、ゲルマン語の語頭の w は $[gw-]$ を経て $[g-]$ に至る⁽²⁾ : Wisa > *gwise > guise 94, wardôn > *gwardare > garder 704.

Vice > foiz 402 の v から f への変化はゲルマン語の発音の影響によるか、或は俗ラテン語に遡り、duas vices, tres vices などの表現に於て、語頭の有声音が先行する語末の s の同化作用によって無声音へ変化したとも考えられる⁽³⁾。

c) 子音+語中の P, B, V

他の子音が先行する語中の唇音では、 p, b は語頭の場合と同様に保持され、 v は $[v]$ へと変化する。

Advenit > avient 9, *respondit > respont 73, *compania > compaigne 298, inversu > enverse 863.

d) 母音間の P, B, V

母音間の唇音 $v[w]$ は2世紀の初頭にはすでに両唇音 $[v]$ に至り、4世紀中に唇歯音 $[v]$ となる⁽⁴⁾。

母音間の閉鎖音 $-b-$ は摩擦音 $-\beta-$ から母音間の $[w]$ と同じ時期に両唇音 $[-v-]$ となり、その後、唇歯音 $[v]$ に至る⁽⁵⁾。

一方、母音間の P は無声子音が有声化する4世紀末に $-b-$ となり、語末の母音の消失より早く、更に調音が弱まり $-\beta-$ となり、両唇音 $[v]$ を経て唇歯音 $[v]$ に至る⁽⁶⁾。

Opera > uevre 6, subinde > sovent 15, caballariu > chevalier 19, *meribilia > merveille 82, habere > avoir 90, novella > nouvele 137, *ab-ante > avant 174, *sapere > savoir 213, vivat > vive 552, tropat > trueve 855.

V を囲む二つの母音のうち一方が軟口蓋音 o, u であるときは、 v はこの軟口蓋音に吸収されて消失する。 B 或は $P > b$ は同じ条件で $-\beta-$ となってから消失する。

(1) Cf. Fouché, Phonét., pp. 558-9.

(2) ゲルマン民族侵入の折、ラテン語の $[w]$ は $[v]$ に変化して久しく、ガロ・ロマン語にはすでに語頭に $[w]$ は無かった。調音の強化によって $w-$ の最初の部分が $[g]$ に狭められ、その結果 $*[gw-]$ となり、 $[g-]$ に縮約される。Cf. Ibid., p. 561, R. I.

(3) Cf. Bourciez, Phonét., § 163, R.

(4) Cf. Fouché, Phonét., p. 642.

(5) Cf. Ibid. p. 619.

(6) Cf. Ibid., p. 618.

*Deciputu > deceü 159, *habutu > eü 210, *saputu > seü 329, *movutu > meü 508.

*Potere > pooir 787 では habere > avoir 90 などとのアナロジーによって15世紀頃 v が挿入された。

半過去の形成では、頻度の高い動詞 habébam (>avoie 328) などの語末音節の b が強音節中の b の異化作用により無音化したことによって、俗ラテン語では -ebam に代って *ea が語尾となった⁽⁷⁾。

*Amebam > amoie 746, *potebam > pooie 748, videbam > veioie 754, *cogitebam > cuidois 758, faciebam > fesoie 763, credebam > creioie 792.

e) 語中の P, B, V + 子音

1) P, B, V+r, l

母音が先行するラテン語の子音群 pr, br では、b も p > b も、β > [v] (両唇音) > [v] (唇歯音) を経て vr となり、本来の vr[wr] でも、[w] は両唇音から唇歯音に変わり、同じ結果に至る。

Discop(e)rit > descuevre 5, *sapere-habet > savra 365, habere-habet > avra 554⁽⁸⁾, vivere > vivre 817, lib(e)rata > livree 826.

子音群 bl は保持され、br, vr の場合と異なり、vl に至ることはない。

Fabula > fable 513, tabula > table 514, *turbulat > trouble 724.

2) P, B, V+r, l 以外の子音

R, l 以外の子音の前では、母音が先行するときも子音が先行するときも、唇音はそれにつづく子音に同化されて消失する。

Tempus > tens 129, *met-ipsimu > meisme 198, subvenit > sovient 212, comp-(u)tat > conte 246, corpus > cors 301, neptia > niece 342, grevet > griet 367.

Tens, cors は近代語の書法では語源の p が復活され、temps, corps となった。

3) P, B, V+y

唇音に yod がつづくときは、y は唇音の影響を受けて調音点を前方に移し、中部硬口蓋音から

(7) Cf. Bourciez, Phonét. § 166, R. II.

(8) *Haberat からは二つの語形 avra と aura が生じるが、16世紀には一般に aura となる。*Haberat の b が w に変わり、*awerat の w が [v] に変化する前に、後接的用法によって強勢母音に先行する e が消失したために anra となった。Cf. Fouché, Le verbe français, p. 395.

前部硬口蓋音となり, yod の持続部の前半は唇音の持続部の後半に一致する。その結果, P のわたりからは *š*, 有声音 *b, v* のわたりからは *ž* が生じる: *Sapiat* > *sache* 639⁽⁹⁾.

Habeo > *ai* 66, *habeat* > *ait* > 135, *sapio* > *sai* 324, *debeam* > *doie* 324, *debeo* > *doie* 335 など動詞の語形では, 後接的用法によって俗ラテン語から *y* の前の唇音が消失する。

f) 語末の P, B, V

語末となる唇音 P は母音の後では摩擦音 *f* となり, 子音の後ではそのまま保持される。有声音 *v* はいずれの場合も無声音 *f* となる。

**Greve* > *grief* 141, **capu* > *cheif* 142, *troppu* > *trop* 302.

しかし, 後接語として用いられた不変化詞 *ibi* > *i* 47, *ūbi* > *ou* 376 では, 母音の後の唇音は極めて早い時期に消失した⁽¹⁰⁾。

なお, *trop* の語末の P は近代語ではリエゾンの場合以外は発音されない。

2. F

語頭の摩擦音 *f* は保持される。

Foris > *fors* 42⁽¹¹⁾, *fide* > *foi* 73, *femina* > *fame* 152, *facia* > *face* 310, **fallita* > *faute* 321, *fame* > *faim* 408.

語中の子音群 *fr* (*fl*) も変化しない: **Sufferit* > *sueffre* 560.

3. U

子音の *u* [*w*] は両唇摩擦音であり, 他の子音の後にしか現われない。子音群 *cw, qw* についてはすでに述べたが, ラテン語の俗間の発音では, 子音群を成す他の子音の後でも *w* は消失する: *Mortuum* > **mortu* > *mort* 189.

W に先行する子音は, 流音 *r, l* を除いて一般に同化によって消失するので, 強語幹人称ではこの語幹と屈折語尾が融合する: **Sapuit* > *sot* 42, *habuit* > *ot* 57, *potuit* > *pot* 145⁽¹²⁾, *habui* > *oi* 539⁽¹³⁾, *potui* > *poi* 540⁽¹⁴⁾.

(9) Cf. 「母音Ⅱ」1, c), 注(14).

(10) Cf. Bourciez, *Phonét.*, §172, R.

(11) 一方, *hors* 170 は複合語 *dehors* (< *de foris*) に由来する。ここでは *f* は母音間にあり, 一方の母音が軟口蓋音であるために消失している。

(12) Cf. 「母音Ⅱ」5, a), 注(8).

(13) Cf. 拙論「強変化型定過去の形成に於けるアナロジーに関する人称間の連帯性について」, Ⅲ, 8), 注(25), 杉野女子大学紀要, 第15号, 1978.

(14) Cf. *Ibid.*, Ⅲ, 9), 注(30).

Ⅵ 流音（震音と鼻子音）

1. R

ラテン語の r は、一般に17世紀に軟口蓋音の r (のど鳴り音)、或は舌背音の r となるまで、巻舌で強く発音される歯茎音 [R] であり、a) 語頭の r, b) 子音が先行する語中の r, c) 母音間の語中の r, d) 子音に先行する語中の r, e) 語末の r など、語のいかなる位置にあっても一般に保持される。

a) Rem > rien 38, ratione > reson 59, regina > roïne 796, rigida > roide 868, *ridere > rire 940.

b) Prend(e)re > prendre 175, contrata > contree 229, cred(e)re > croire 248, brac-(h)iu > braz 398, gravare > grever 781.

c) Hora > eure 24, *morire > morir 326, parabole > parole 403, *coraticu > corage 692, parare > parer 702.

d) Terminu > terme 32, mercede > merci 61, forte > fort 269, arbore > arbre 389, *targa > targe 390, *gwardare > garder 704, *turbulat > trouble 724⁽¹⁾.

e) Cor > cuer 50, habere > avoir 90, foru > fuer 94, venire > venir 394, caru > chier 534.

語中の rr も保持され (cf. terra > terre 170), 16世紀まで二重子音が強い巻舌音で発音されたが、17世紀にはこの発音に迷いが生じる⁽²⁾。

更に, tr, dr の閉鎖音の同化に由来する二重子音の場合も事情は同様である: Considerare > consirrer 295, *hatiraio > harrai 494, iter > oirre 915.

*Mor(i)rea > morroie 501, *suffer(i)rea > soufferroie 614 では弱母音の消失によって二重子音 rr が形成された。

語末の r に関しては、その後の音韻推移が重要である。すべての -er 動詞の不定詞(cf. *jectare > geter 226, *minare > mener 289) と, -ariu に由来する大部分の -ier (-er) の語尾を持つ実詞(形容詞) (cf. caballariu > chevalier 19, vir(i)diariu > vergier 30) の語末の r は中代フランス語期、特に16世紀に消失し、他の語形にも及び、17世紀には -ir 動詞の不定詞(cf. dormire > dormir, 145, morire > morir 326) の語末の r も消失した。その後、この -ir 動詞の r は18世紀の中頃から dire, écrire などの動詞の影響によって復活された⁽³⁾。

2. L

(1) *Turbulat > trouble では流音 r が先行する母音の前に移り、語頭の t と tr を成した。

(2) Cf. Bourciez, Phonét., § 181, H.

(3) Cf. Ibid., § 183, H.

震音 l は a) 語頭, b) 母音間, c) 子音と母音の間の語中の位置ではいずれも保持される。

a) Locu > leu 63, longu > lonc 127, laetu > lié 312, lacrima > lerne 469, laxare > lessier 770, lassu > las 885.

b) Celare > celer 3, salute > salut 398, parabola > parole 403, *volere > vouloir 564, solaciare > solacier 859.

c) Placet > plest 204, *paraulare > parler 300, claudere > clorre 477, fabula > fable 513, tabula > table 514.

母音間の語中の ll は, 長母音の後ではガリアの口語ですでに l に単純化され, nūlla > *nula > nule 94 となり, novēlla > novele 137, bēlla > bele 613 などでは古フランス語の初期に二重子音が縮約される。その後, 15・6 世紀から語末の e の前でこの二重子音が書面上復活されるが, 発音の変化はない⁽⁴⁾。

d) 語中の l (ll) + 子音

子音の前に位置する語中の l 或は ll は, a, e, ē, o, q の後にあるときはすでにラテン語期に舌の緊張が弛み, その後部が軟口蓋に近づき t となっていたが, 先行する母音の同化作用によって, 舌の前部が下がり, 一般に11世紀末頃 u に母音化し, 先行する母音と結合する⁽⁵⁾。

*Alicunus > aucuns 5, alteru > autre 13, bellus > biaux 43, tales > teus 59, nullus > nus 115⁽⁶⁾, *cels > ceus 118, multu > mout 129, dolus > deus 156, *volet > veut 184, valet > vaut 207, dulce > dous 296, *malifatius > mauvés 302, melius > mieus 307⁽⁷⁾, oc(u)los > ieus 308, collocare > couchier 517, falce > faus 577, calet > chaut 597, illos > eus 653, ultra > outre > 870, volsisset > vousist 950, *assaltu > assaut 956.

定冠詞の男性形 (il)lu > lo が前置詞 de, a と結合し del 691, al を成し, 子音で始まる語の前で各々 du 127, au 24 となった。複数形では *los, las > les が同様に des 957 に至り, as は単数形の影響を受けて13世紀の末頃 aus 308 となった。一方, en+lo は el 725 となり, 子音の前では eu から e が u に同化して ou 301 の語形が現われる。

弱母音の消失によって隣接する l'r では, その間にわたりの d が生じ, この d の前で l が母音化する: *Volere-(hab)ebat > vouldroit 459.

e) Y と結合する L

(4) Cf. Ibid., § 186, H.

(5) Cf. Ibid., § 188, H; Fouché, Phonét., pp. 856-8.

(6) Cf. 「母音 II」, 7. なお, 複数形の nus (<nullos) は単数形 nul (<>nullu) によって nuls につくり替えられた (cf. Fouché, Phonét., Vol. II, p. 314.).

(7) Cf. 「母音 II」 c), 注 (8).

L の後に母音接続の i, e がつくか、母音+喉音が l に先行すると、yod に隣接する l は j に湿音化する⁽⁸⁾。書法は il, ill である。

Consiliu > conseil 3⁽⁹⁾, *meribilia > merveille 82, vig(i)lavit > veilla 149, *molliatu > moillié 311, *voleo > vueil 363, doleo > dueil 415, auric(u)la > oreille 846, meliore > meillor 886.

Fallire > faillir 16 はアナロジーによる⁽¹⁰⁾。
Aillors 50 については「母音Ⅱ」, 6, b) 参照。

3. M, N

a) 語頭の M, N

語頭の鼻子音 m, n は変化しない。

Mercede > merci 61, nocte > nuit 144, minus > mains 162, neptia > niece 342, *mentionica > mençonge 595.

b) 子音+語中の m, n

子音と母音の間に位置する鼻子音も保持される。

Dormire > dormir 145, tormentu > torment 235, *pasmata > pasmee 837.

ラテン語の子音群 gn の g は喉音であり、n は歯音である。両者は硬口蓋で調音点が融合して ŋ となる：Cognitus > cointes 43.

c) 母音+語中の m, n

語中の鼻子音は外破音でも内破音でも、先行する母音を鼻音化し、自らの鼻子音を保持する(「母音Ⅱ」, 各々の母音+鼻子音の項参照)。

*Pena > paine 80, tenent > tienent 377, minat > maine 453, septimana > semaine 454, donare > doner 466; subinde > sovent 15, pendere > pendre 176, cantione > chançon 294, intrare > entrer 392.

その後、フランス語に於て鼻子音が外破音であるときは、鼻母音は後に非鼻音化し、鼻子音は依然保持される。近代語の tiennent, donner などの二重鼻子音はこの鼻音化の名残りである。

一方、フランス語に於て鼻子音が内破音であるときは、鼻母音は保持され、鼻子音は中代フラン

(8) L の湿音化は、ly では2世紀頃であり、cl, gl ではロマン語期である。この湿音は、18世紀から19世紀の初め頃に至るまで保持されて後、[y] に弱音化する。Cf. Bourciez, Phonét., § 190, H.

(9) Cf. 「母音Ⅱ」, 3, c), 注 (12).

(10) Cf. Bourciez, Phonét., § 186, R. II.

ス語期に消失する。

Conven(i)ente > couvenant 23 の v に先行する n の消失を, Fouché は, t の前の内破音の n との異化作用によって説明している⁽¹¹⁾。

Diurnu > jor 24 では, 複数の子音群 -rns が 9 世紀以前に -rs に縮約されたことによって, jor が jor となった⁽¹²⁾。

Reddere が *rendere から rendre 466 に変わったのは prendere > prendre 465 の影響である⁽¹³⁾。

一方, *cupidietat > covoite 225 は近代語では接頭辞 con- とのアナロジーによって convoite となった⁽¹⁴⁾。

接続法現在の語形 tornet > tort 92 では, r が先行する二次的な子音群 n't の鼻子音は消失したが, アナロジーによって近代語では tourne の語形につくり替えられた⁽¹⁵⁾。

母音或は r が先行する子音群 mn は, 順行同化によって 10 世紀頃 mm となり, m に縮約されるが, 鼻子音に先行する子音は, 同じ時期或はその後口母音化する。

Dom(i)na > dame 20, term(i)nu > terme 32. nom(i)navit > nomma 126,
fem(i)na > fame 152⁽¹⁶⁾, an(i)ma > ame 211⁽¹⁷⁾, domnicella > damoisele 255.

二次的に形成される子音群 m'r, m'l の場合はわたり音として b が, n'r の場合は d が生じ, 鼻子音は挿入された語中音の前で先行する母音を鼻音化する。

Camera > chambre 37, similat > samble 141, trem(u)lant > tramblent 179,
remem(o)rat > remembre 180, insimul > ensamble 434, ven(i)re- (hab) ebat >
vendroit 458.

d) M, N+y

子音群 my(mmy) の yod は, 唇音 b, v, +y と同様に ž に子音化し, 鼻子音は先行する母音を鼻音化する: Commeatu > congié 465.

一方, ny(nny) の子音群では, yod は先ず n を湿音化し, 次にこの yod は 5 世紀末までに ŋ の前に転移する: ny > yny. その後, 外破音の yod は消失し, 内破音の yod は自由母音 a の二重母音化の後 (7 世紀の始め頃), 口蓋化した子音 ŋ に融合する。従って, この -iŋ- は先行する母音の二重母音化を阻止し, その後, ŋ はこの母音を鼻音化する。書法は -ingn- である⁽¹⁸⁾。

*Compania > compaingne 298⁽¹⁹⁾, *bisonia > besoinne 364, remaneat > remaingne

(11) Cf. Fouché, Phonét., p. 800.

(12) Cf. Ibid., p. 782.

(13) Cf. Bourciez, Phonét., § 195, R. III.

(14) Cf. Ibid., § 195, R. III.

(15) Cf. Ibid., § 195, R. IV.

(16) Cf. 「母音 II」, 3, e).

(17) Cf. Ibid., 1. f), 注 (21).

(18) Cf. Fouché, Phonét., pp. 915-6.

(19) Cf. *Compānia > *compāiŋya > *compaiŋe > [kompā(i) ŋe] > [kōmpāŋe] > [kōmpanə] > [kō(m)paŋ(ə)]

524.

その後、鼻子音は中代フランス語期に口母音化し、鼻子音は保持される。

Seniore > seignor 93 については「母音Ⅱ」, 6, a) 注(2)参照。

N に子音がつくるとき(或は n が語末となるときの)は、先行する母音は、ŋ の屈折から生じる yod と二重母音を成し、鼻音化する。湿音 ŋ は、それより先、7世紀の末頃までに非口蓋化し、歯音 n となり、16世紀末消失する。

Punctu > point 197⁽²⁾, sanctus > sains 417, plangit > plaint 480, tingit > taint 724, stringit > estraint 835.

e) 語末の M, N

絶対語末の m, n はラテン語期から消失するので、実詞或は形容詞の被制格の m などはずでに無音である。

Gente(m) > gent 1, consiliu(m) > conseil 3, *directu(m) > droit 98, placitu(m) > plait 103.

単音節でも絶対語末では m が消失する。

Sum > *su(cf. sui 78)⁽²⁾, jam > ja 191⁽²⁾, quam > que 623⁽²⁾.

しかし, in > en 37⁽²⁾, rem > rien 38⁽²⁾, *mum > mon 93 (sum > son 226)⁽²⁾, non > non

(2) Cf. 本稿, III, 4, b).

(2) Cf. 「母音Ⅱ」, 6, c). Estre の一人称単数 sūm は強勢が置かれることもあり、後接語ともなるが、後接的用法が発達する前に、強勢形*sū が優勢となり、一般的となったために m が消失した。Cf. Fouché, Phonét., p. 652.

(2) Jam の如き語は、完全に強勢が置かれ、云わば自立していて、m が実際に語末であるので消失した。Cf. Ibid., p. 651.

(2) 関係代名詞 quem, と quam では、後接的用法によって、*mum > mon と同様に、語末の m が保持されるはずであったが、疑問詞 quem?, quam? が m を失ったので、関係代名詞でも m が消失した。Cf. Ibid., pp. 651-2.

(2) In は後接語として語末の n を保持して en となった。In illu > en el では n が消えて el 725 或は ou 301 となった。Cf. 本稿 VI, 2, d).

(2) Rem の場合は、語群の最後或は文の最後にあるときは強勢が置かれたが、rem publicam の如く他の語と密接に結ばれることがあり、更に、in rem est の如く母音の前に位置すると、m は母音間にあって消失する理由は全くない。これらの用法とのアナロジーによって、rem では、語末の m がその他の位置にあっても保持された。Cf. Fouché, Phonét., p. 651.

(2) *Mūm > mon など本質的な後接語では、語末の m は語中の m と同様に保持された。しかし、女性形 mēam > ma 170, (tūam > ta), sūam > sa 44 の m が消失するのは、Fouché によれば、tūam, sūam では、二つの母音が同じ音色を持つので、たちまち *tum, *sum となり、mēum もこれに倣って *mūm となったが、女性形では、異った母音が二つついて、縮約されることなく、二音節が保持されている間に語末の m が消失し、mea, tua, sua となり、後接語として用いられ、強勢のある後続語の影響を受けて呼吸と調音の力が語末に置かれ、meá, tuá, suá が ma, ta, sa に縮約された。Cf. Ibid., p. 652, R.

116^㉗などでは、語末母音の消失によって絶対語末となる m, n (cf. *unu* > *un* 30, *homo* > *hom* 115, *fame* > *faim* 408) と同様に, m, n が保持され, 先行する母音を鼻音化する。その後, 鼻音は16世紀末に消失し, m或は n として書法上残されるに過ぎない。

-
- (㉗) 後接語として用いられた non が語末の n を保持して, non が一般的となる。強勢が置かれるとフランス語では non であるが, 無強勢では nen となり, やがて, ne に縮約される。しかし, 母音の前では nenil 348 の如く n が保持される。Cf. Ibid., p. 653.